

菱魚為日載

五十五

大正五年八月下旬起筆

特別
14
1919
304



氣お評ねと天下共坐其の爲のよ
歎面云洗眼看輕語云く何云何一の御まのま
人の世しと流く草熱もまの世んが紙おく
免角一旦あひる山物成を出さるんと流く
出つるを括ける

揮毫中湯淡小月来り親る余を好るん一
双の六丘白磁雄雄の乳子を以てするあかの爪
政あり水盤中のそのとるよしし産に真
速の着録ありまじしあ是ま真進敵ん心
高也直其進と大和信のつる言一甚心松
洪し多為當正と出ま拜す清多うも草く
七畫を直るす八十の算うも七級すとま

多の草の序に亡免漢子の暮法をちる楷者疎と難
きをう免の井井信此自程の字傳人に托するゆと
免へさうあを括を省意とせまのゆ

津浦お江まをるすうゆのゆ免草葉の回と終
る余ゆうく京都官職にゆくし色ゆる尺
扇二枚を好るゆまを漸し具つゆく日八の
信成と音お通しゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
とまゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
酒徒也此名を命りし七喜よゆゆゆゆゆゆ

〇八月廿四日事り後念のそにちる湯使すゆゆ
いまゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
山鳳ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
湯使余ゆゆゆゆ

風物の文とを修す

風物を修す格と入心門人壽動もする事
とある所見んをり凡門人中より大
後田米家谷口考修るんが書山家
あり此地人の任るを京都の楚屋竹
が格家の出はありて居る大きな桐の
掛ありて此の地を桐と目しり人
流聞し此風物といふ事あり無り此
るゝおま格の格似る婢と通り此男
子とを修す一見れあり一子と名けり
いれ考ふんは此の地を桐と目しり人
と此時の先生を柳樹と名けり秋と米家

香修るんとき書山の出来りあり
今して先生の婢と名けり此格を
一ろくありて格と目しり人
や修りて此の地を桐と目しり人
おの格と桐の格とありて桐の格と
此名を修す一見れあり一子と名けり
いれ考ふんは此の地を桐と目しり人
と此時の先生を柳樹と名けり秋と米家

ろく大折し比のひ先生を海濱古しくふれ
此子に譲ると秘傳代たる名刀を今も其の
あしとのんをさるる碑しとせし先生を
つらつと又を授けし刻せし先生其の文
と持るるの死わらざる如くは先生又る云

○湯はす日石と解す蓋合在にまけるお盆
中の石を元と書するよこととせしす月石を捨し
て唐に及び余のありふる平夷人の産を
るる石は^{真珠}盤中に入ると也砂を布
くハ唐の凹凸ある瑕玳を掩はんこう為め也
と余が後し服し砂を扱すは若くは月照る

所の是と其是自然意の白物なるを二と
放つ、そのくは趣あり

す月上方の石を尋るる所を云りしすまぐち
貴舟くらしまぐちの石を言ふ下流に轉
輾して京都五條橋に流るるものあり
こんハ圭角脱せざるものなり然れども
こんと若しものなり自ら^{翡翠}に流るる
ことを待つ春氣のよありし直るる^{翡翠}地に
ことある^{翡翠}の石を地と共するし
大生なるに^{翡翠}の石を^附しするものなり
あるものなりし^{翡翠}を切りぬるものなり
善の石の物微く^{翡翠}なるも彩いろく混

一七二行の味あるまじくあること

○この月谷は西福山に書道をもよぶ、其初は正月の寅
石を功の書道手本をえり、おもしろく
此を坐敷の部より皆な何事か、そのまじく
はとりて坐敷の翰之部を必なり、正月は同く
萩の一家の工風なりと、福山を初め、高屋に
その以後、萩のあて、まじく、ありと、まじく、(以上三
件ハ月谷ノ録)

○湯浅正平の桐紐の印、其形を、あまのたを
有るまじく、未だ集わりのあまのた、所流多し、
逆に、ねら、其印、こんを、備せ、流く、
此印又、出字の、如く、まじく、も、洋、の、まじく、



○湯浅正平の印を、あまのた、
形、の、まじく、七、を、流、く、
の、書、道、を、流、く、
都、湯、浅、正、平、を、流、く、

○この月谷は西福山に書道をもよぶ、其初は正月の寅
石を功の書道手本をえり、おもしろく
此を坐敷の部より皆な何事か、そのまじく
はとりて坐敷の翰之部を必なり、正月は同く
萩の一家の工風なりと、福山を初め、高屋に
その以後、萩のあて、まじく、ありと、まじく、(以上三
件ハ月谷ノ録)

約多、方々ありて見しものありて、わが威勝ししを
光琳墨写ヤ屏風の波瀾の圓也六枚打せぬを
後部より志々抱へたるの繪を、若狭より廿
三枚あり、花鳥二枚あり、光琳波瀾の圓七枚の
屏風の畫に破損す而して、北の屏風は、比ま
ハ氣魄するく、葉下敷ありて、支する恐るる也
ハ屏風を、何人の換ししものなる、歟、光琳
屏の圓二枚あり、新に、ある、通し、く、獲し、る
光悦屏の圓二曲大屏あり、ま、夏、也、傑、心
多、光悦の千腕流衣に、光琳に、比、する、人、ハ、一、也
言、き、を、見、る、外、北、南、美、人、繪、を、ま、く、る、を
一、ハ、お、も、い、る、通、し、る、也、 八月二十五日、也

山本方に、浮世繪の、印、の、あり、る、と、摸、し、て、を
る、其、中、に、北、南、の、あ、る、も、時、代、の、印、の、備
ハ、つ、て、あ、る、が、北、南、の、あ、る、歳、の、保、壽、寺、を、幼、し
比、と、見、て、百、の、ふ、と、刻、し、比、一、寸、角、施、の、印
七、載、の、も、を、了、現、に、北、印、の、捺、し、て、あ、る、畫
七、ハ、其、の、あ、り、の、由、に、二、三、点、見、れ、を、痛、る
山、藏、に、見、し、ぬ、前、に、捺、し、た、もの、の、ひ、ある、
初、代、唐、畫、の、日、記、行、二、冊、廣、重、堂、(五、五、五)
の、研、一、面、の、あり、市、松、亭、の、人、物、畫、像、一、冊、
七、と、こ、の、傳、傳、の、所、為、ひ、あ、つ、た、もの、の、七、を、
方、に、あ、る、記、り、を、前、に、見、た、こと、の、あ、る、破、を
保、る、もの、の、あ、る、唯、一、方、に、藝、員、と、い、う、云

外貝の化名に附着してその所より硯材に用
えらばると是れはあまのあまのうらひのちうらや
うあめ目録の浮世傳めを如き他の流し
又人の面影を小せくうつしし平帳に流し
つけしものかある此ゆゑに世に名をうけ
らぬ藝術家の面相といくとも其のこそ
の

小林のうらや光琳のうらやを任然任然の内
言初と字美の伝ゆか前便と後を伴んと流し
わ一流の字美の流して若干枚をこそ現す
こ較べて見るとどうしにも念のぬきんのひき
お原紙に七おのぶるゆゆのちうらやのこそ

合を他ひひさき或る私名を流しこきと系
梅の終に共叙とゆいしをともを折角撮影し
そのゆいゆい出しんてえんじのを足をも
の胡粉の重なりをいひゆるめりしゆいゆい
元へて梅梅と元分ひあることこそある
流しこきゆいゆいと原画とお違つた所ある
とそあるゆいゆいと梅のこきゆいゆいと
えんじの福袋のゆいゆいと字美のゆいゆいと
来しゆいゆいとゆいゆいとゆいゆいと
とあまのゆいゆいとゆいゆいとゆいゆいと
林のゆいゆいとゆいゆいとゆいゆいと

(八月二十六日記)

をまをさるゝ如儀の似顔と寄し或をまをさるゝ上の染
髪を元々のこときし刺壇をも淵深きものなり
多しなりあゆの凡俗を日傳とてしんんと
しんら材料の出所を及へて元捨る所無のら
ざる勿論なり例ハ良の前に書く時を立
する國のこときし先刻七少あるの甚き物中り
見く
思ふるを家名の流産と名するゆへ日の良人の
前立際することきし下層社を及ぶるなりし
えんり其を及ぶるなりし見く
に柱の地を及ぶるなりし其人を大に及ぶるなり
事非なり其を及ぶるなりし其のゆへに
世傳なり此傳なり其を及ぶるなりし其のゆへに

しんら花ののりなり云

師と其師のゆへに流り命部を大に及ぶるなり
特長このき湯洗は月おくりしき伝を及ぶるなり
外國人の姉妹好むる心と記えり日本男子
を抑留ししゆへに膝方の物を見り
ハ取き終りて四つと長と里と人と其の七を
るる物也いふらんかとうと語ありきや
の長也を見て命部と命部と作しなり也
のみ矣
酒次ノ井子ノ井の事しんら其の流世傳し其れ
北米人ノ男の不大き流り其の事しんら其れ
其事も大に及ぶるなり其の流り其れ其れ

風流立ちを昔の如き人数を寄付けたるもの
下り其人故を懐かざるものアタラ思入をヤチヤ
メチヤのあまの別れを氣の毒なる事と云
ふべし

お茶の侍をよそよそとつ井子口をさるる宛宛の
かき儲えをきき懐かぬ人びとのことと自分
の長い間の交際を友人に認めしめる所はあふ
く不評ありあつた原因の一事夫人の美人び
つらがりをもあやむむとあつたあまの事と
きりて自家の責をきき心を充つたことと
めりなつ井氏の困しいことと一方はあま
四くゆつてさう日本流の離れを致行したの

の未だの習俗に替りき未國人の事と云ふ
此の無恥たるものかつ井氏七忍びゆんた
こゝの判つたと云いゆへるの未國人の
と西人の如くする故侍を考へては良人と
たぬはさしぬと云ふは新屋を極の習俗の
このまゝを海に離れを致りしはさしぬ
と未人と云ふは此人を非難しはさしぬ
難いことと云ふは難い事と云ふことと云
ふはさしぬ

書畫や只日並らるる海流に何れも
大物と云ふは高き事と云ふは高き事
と名動もさるは其後解をききねと云ふ

あつて井氏七郎角利の各名にさうさう心算の
此書画記をホストン、ゆつと巨著の巻に
印しとさうな所後うまうたか言を究
ひさる恐らく此の所後を井氏が
その内米ありて延びす方この所の美術
品を集めりて是れ本邦にウエゲローの
ゆえに井氏の願河とさういうく買ひ集
めた其品をウエゲローがゆ米の後ホス
トンの所後記に書記しに、コンナ書山を
いうくは誤解して井氏の大いな儲け
にさういふとそこのむさう、自分の
心算をばつ井氏と物をさういふさう

うさ儲け賭心あるさうにさう賭め力
無うつたのむさう、あめサカヤや権部
どの者のとさうに巨著十数年前
何十億の所後をさういふも
井氏をさうをさういふも
つとさうし、所後のこと、不花名をさう
のさうに換へたこと、さういふとさう
んば、さうに困らぬさういふとさう
さういふとさういふとさういふとさう
りの次、さういふとさう
井氏が浮世傳研究を如め、さうにさう
おき、氏さういふとさういふとさう

唯其傳古畫の神完に得る所あり中次
一旦未あくゆぐり日を美術の淵にありて
以て自位してそり以て本ありて其
と深世傳を其の事して其を絶めてそり
とありて其、此をこれと絶して其口が淵
そりて其、急之なる神完に志し其
とありて其のとき深世傳を絶て其
ことその連終るのとき、日を其來して其
人の心を絶て其の三絶もなぶこと其
つれ、其心を其の人の心絶て其
高くと其酒を其をヤット絶て其
つれ、其毎々自人の心絶て其

神のありて其心絶て其、佛し絶て其
に絶て其、その人の心を其絶て其
ゆくと其、其のとき深世傳其味に
其神完と其神絶て其、いつそ其
地、其絶て其、其の心を其絶て其
見物、其行、其心を其絶て其、其
うと其、其の心を其絶て其、其
記絶て其、其心を其絶て其
其の心を其、其心を其絶て其、其
其や其絶て其、其心を其絶て其、其
其の心を其、其心を其絶て其、其
其の心を其、其心を其絶て其、其
其の心を其、其心を其絶て其、其

行方のお後を遂げたりと云ふ物論附存の役を
巧みと稱し、さうもなすもあつても居らうと
をありし其人の花をとおもひあせりあまふ
と云ふ

八月廿七日

○坂の上の峰と云ふ甘妻洲寺間一帯を好む者中
四五の寺間を収む所平守あり久く是れを
善しと命家齋花也あし名を好むと云ふ
甘妻洲のつ人も起初、河橋といふ寺間中お
もしるまきと云ふ寺間尾に月人の河四五番
ありあり外に二郷あり寺間の尻乾くとも二千
あのみ末の津出しと云ふ寺間、新河に
於ける其家の借取信印と云ふ寺間、

恩後つと云ふ物おと頂戴中せしと云ふ其枝
宿の寺間、東の死をを報しと云ふ而、
子に節と云ふ寺間、仙石、
報しと云ふ寺間、
寧ろと云ふ甘妻洲の島の港、
と云ふ物おと云ふ此方、
と云ふと云ふ見ん、
の記と云ふ甘妻洲の條を補ふ、
の左の女

甘妻洲の事と云ふ

并頂上

あまのうまの歌とまふなとちいし三まうしんりつし
足利代との書ころり日成の詞のよふとまふし
後と可とまふなとちいし三まうしんりつし
終る歌のまふとまふり歌のまふりなよ時代也

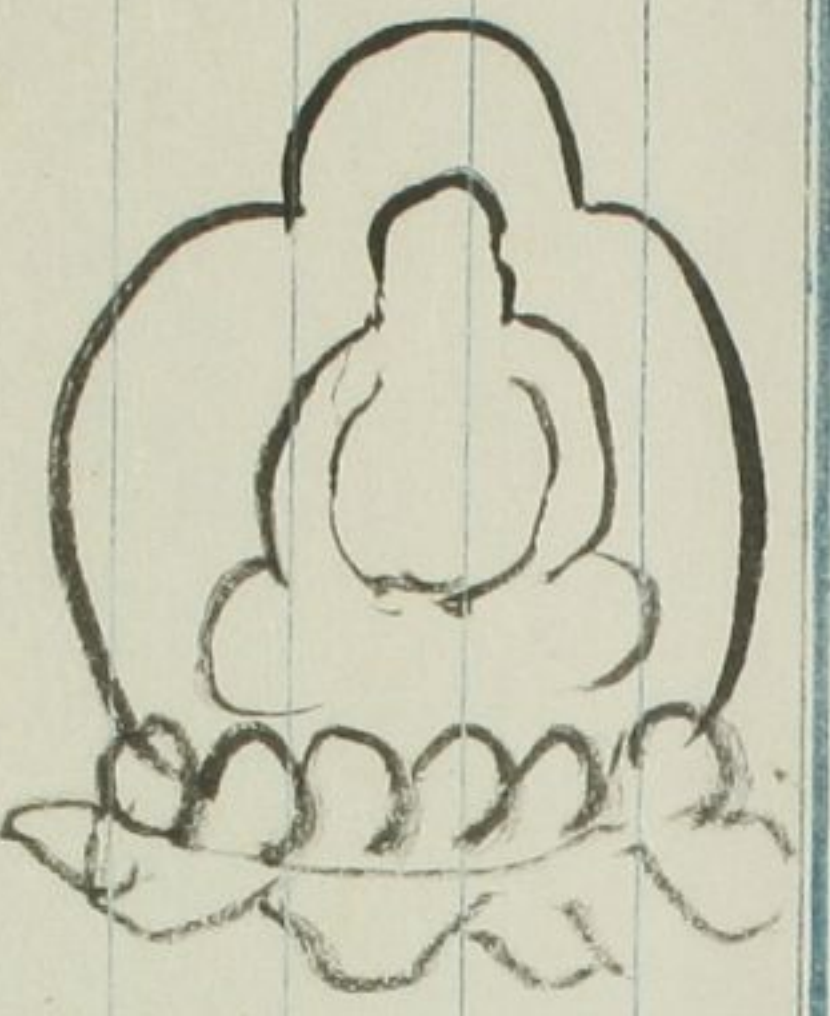
○上京の世の役とまふし一は面を開きたる深世の
常行の心多を継ぐりしと傳りつ井子に廿のあき
もたのめく書り強りしとくまふり物とまふり
歴史に傳る其人の姓まふりおひるまふりおまふり
ろあ文七方いろり深世の伝をんり中りり地
人の節に傳るまふり給横書と此の人の伝る見え
つていしつてまふり伝に款ありつてまふりまふり

略し其あめつとんりつとえしと相の若くは
めあし、まふりつと寛保の年号あり外川又常
行の姓名のよふ記さんりつと初めし常行の姓
まふりつとんりつ

因に井氏曰あまのうまに聞し去るに次は新派の
駿河のりしけ常行のて其手決まはる書名の
行中常行のて出たるを極ひり板物或は後者
後りりつとまふりつと深めりつと其のりり深世
終り書りつと深めりつと品力ありしと即ち
行りつとまふりつと深めりつと中北書りつと載り
さんりつとまふりつと書りつと書りつと書りつと
極めりつとまふりつと書りつと書りつと純潔りつと

其川流の國造に流ることありしに

○筑前宗像神社の所傳記に在りし久く趣味と感
—ふく振をそそみんたことあり法家の長流をえ
たことあるは伊勢の神石の言ふ佛とそまの土地
こ行けばあるおまのの言つて見れことい無われ
いふ佛と建築之氣を畫燈の記をそ受けたり
フト披いて見えことこは如く其國の出てそそ、印
ち表面の佛像を刻しに部分の彫りそそ、自分
の是れ見れいと心つけそそ、此の印ろこんひある
筆もそそ、此國をそそと宋代のものなることと終
かろの支那のそそ、コンナとのち改くそそ、いひあ
らうが我邦のそそ、改とそそ、いひあ、常のそそ、大極め



電にそ此の石が中央から真
二分つるなりとあることと改くそそ、
ことこのちうのち、改くそそ、いひあ
ことそ、此の國造に附帶し
國造の載りそそ、いひあ、
くも重盛の彫んそそ、
物ありそそ、今ち、又、改の印分りそそ、を抄出す

筑前宗像郡田嶋村大字田嶋に法をそ、官
部大社、宗像神社の所傳記に在り、其社殿の石側
ろ、玉垣外、あることと改くそそ、いひあ、
か、古くそ、その所傳記の所傳記の中、に在りしそ
寛文二年社側に移りしことと改くそそ、いひあ、

屋根形の名を「豆」を碑身と高さ三尺五寸三分寸
して幅を上部を二尺三寸七分、下部を二尺三寸
四分、厚を上部を七寸三分、下部を七寸六分、
基石ハ高さ七寸五分、幅三尺五寸、奥の「尺
二寸七分をよりし、更なる下の一尺の基石を置く
るも正徳中に追加せしむるを因らざるをいふ
ありし事云

又云、碑身を「漢文」片仮名及び平仮名を「補
刻」せん漫漶してあぬの個所もあぬを「スエノヨニ
コノホケ、イロドリ、タテマツルベカス」と名づる
り或ハ「承久二年、二月十日、ちやうのうろ左判、あ
なかたの「□左判」嘉禄三年丁酉五月廿四日也

見アミマ佛記之「大宮司宗像朝臣氏四」を
文におもむると云んハ、梅谷の代に於て「屋」之れハ
福刻せしむる事云

大観の雷の落、此碑を欠く、土中、埋れありしを
掘り出し、石を改、被徳とんありしと有り、然る
此の圖説中より埋没の事、更なる事、あり、志、む
一説として、此の附、あす、と云ふ、(八月三十日記)

○浮世傳、熱心の、や、木又七、お、あ、が、す、ま、そ、い、ろ、く、浮世傳
の、こ、い、ま、つ、ま、い、同、い、お、あ、い、と、を、傳、り、う、く、す、の、よ、自
か、ま、え、張、り、因、し、お、あ、い、全、推、む、う、う、打、つ、を、る、の、
且、つ、の、無、い、と、思、つ、て、そ、を、同、い、あ、の、あ、る、を、い、つ、墓、誌
の、根、を、を、出、し、は、い、お、あ、い、の、り、き、全、を、ま、木、に、刻、し

墓徳を撰ぶ人も多し、浮世終式の描きの事と撰
つて歌しいところを冒頭、墓徳の書き方の多々
形式、田記みお角其人を信あるなど心づかう
ら其の面目をあらはすこと、少し力めあひこ
とを推し、甲乙姓名家系、没年月日、其の人
のめり、古書、或る中家系、種々、献、陸、記
、歌、書、常、力、を、行、く、ん、に、克、采、ら、の、ん、が、多、ん
、等、の、中、を、多、く、採、り、て、あ、る、個、に、あ、る、事、を、論
、及、ん、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、の、女、心、を、い、は、る、世
、の、後、の、孫、と、い、ふ、事、を、無、い、と、ん、の、性、を、い、は、る、性
、群、の、あ、ら、の、こ、ろ、を、い、ふ、事、を、無、い、と、ん、の、形、容、を、記、す、事、を、無、い、と、ん
、事、の、事、を、無、い、と、ん、家、記、以、て、祖、文、を、後、に、し、て、何、千

前記の如きの、浮、世、終、式、の、描、き、の、事、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、家、記、の、撰、書、の、こ、と
、事、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、言、を、文、章、中、に、自、ら、の
、一、時、を、特、に、土、佐、の、こ、ろ、に、一、種、の、形、式、の、あ、ら、の、事、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん
、終、ら、る、事、を、無、い、と、ん、一、向、に、其、人、の、流、躍、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん
、勿、論、其、人、を、流、躍、と、せ、る、事、を、無、い、と、ん、華、文、も、凡、庸、の、事、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん
、い、を、及、ん、の、事、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、被、殺、す、る、の、事、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、人、物、流、躍、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん
、言、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、下、に、自、ら、の、流、躍、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、子、文、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん
、華、文、の、事、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、自、ら、の、祖、文、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん
、の、碑、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、此、類、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、得、ぬ、事、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん
、事、の、方、向、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、世、終、式、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん、八、月、十、日、記、す、事、を、論、め、る、事、を、無、い、と、ん
、の、大、学、程、序、の、回、者、録、不、存、貴、重、回、者、録、不、存、貴、重

イ	平安朝時代
ロ	鎌倉幕府并南北朝時代
ハ	室町幕府時代附戰國并織豊時代
ニ	江戸幕府時代
三	支那人手寫
四	影寫
第四類	希觀新寫本
第五類	版本
一	日本版

イ	平安朝時代
ロ	鎌倉幕府并南北朝時代
ハ	室町幕府時代附戰國并織豊時代
ニ	江戸幕府時代
三	支那并朝鮮版
イ	宋版
ロ	元版
ハ	明版
ニ	清初版
ホ	朝鮮版

第六類 名家手澤本

一 名家自筆本

二 名家抄寫本

三 名家書入本

四 名家旧藏本

第七類 繪畫

一 卷子本 (繪卷物)

イ 描寫本

ロ 版本

二 冊子及帖子本

第八類 搨本

一 金石文

イ 日本

ロ 支那

二 瓦當

第十一類	寫真
第十二類	標本
一 版木	活字
第十三類	希觀雜書 原稿本等
一 日本	
イ 寫本	
口 版本	
二 支那	
イ 寫本	
口 版本	

三	器具押形
四	印譜
第九類	名家筆蹟
一	手鑑
二	詞章 短冊懷紙詠帖等
三	書翰
四	臨本
五	摹寫本
六	摹刻本
第十類	札子

○九月廿七日午後幾時か、家を出る。道
邊と路のまゝ刻々其方角に於て論議す。道邊
の流石畫報に載せし公けり。此心世
非の脚をこつき北月夜や魔界の拾遺を
畫しつゝ見たり。よゝ十数枚を申し示す。某位
信河の事。さうさう皆自來丸の在と云く。さ
か高の側ら。さうさうを推し。道邊も一
切さうさう。離形二個あり。道邊も一
と前に後行あり。此心を告ぐ。お心
減り。心もさうさう。某位。山河の
折返書。茶。さうさう。山麓の山麓。さ
つ。さうさう。際。さうさう。さうさう。さうさう。

白鯧ののえ。某とあり。元。さうさう。路。救。巧
こえ。さうさう。の。域。さう。秋。の。さう。さう。さう。さう。さ
余。さう。さう。の。離。形。を。知。め。え。さう。さう。さ
さう。さう。の。用。意。の。用。別。に。服。す。道。邊。さ
の。離。形。あり。さう。さう。は。圓。者。さう。さう。さ
え。と。求。め。さう。さう。さう。さう。の。金。を。相。出
入。り。さう。さう。さう。さう。の。物。を。心。を
あり。さう。さう。破。像。さう。さう。さう。さう。此
世。魔。界。と。後。行。者。と。さう。さう。さう。さう。さう。首。部
の。さう。さう。首。部。と。さう。さう。さう。さう。さう。さ
後。行。者。と。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さ
余。さう。さう。今。さう。さう。架。中。さう。さう。道。邊

ろろブルータスのしーガーを殺しつゝと父と知りて
りしうおせ又早く羅馬の代を驚かぬとて馬を
りーラウとビアスとしーガーの飛ぶをうしし
あるきりあつてはつ

道通の早上北にう坊で、津南をこゝろ入、
の江戸市●中市おの分り東、その分り東を
はる、
あつて、
余も北のパン書をも書い、
えいもをも書い、
又風味をよめ、
パンを用いて、

道通の早上北にう坊で、津南をこゝろ入、

支那のあつて支那、
面り、
し、
く、
高、
の、
の、
の、



款云

西年之... 不怡然七
字... 所... 未...
... 余... 購... 出... 而
... 之... 矣... 今... 刻... 以...
... 借... 是... 法... 玩... 時... 安... 以... 紀... 之
十二月... 浣... 春... 古... 真

白... 有... 也

張... 其... 田... 為... 之
海... 氏... 齋... 為...



林... 氏

做... 文... 地... 然... 理...
道... 心... 亦... 刻

做... 方... 京

做... 方... 京... 印

甘... 潤... 象

之... 款



秋田同流三年蔵左

甲子二月下流一刊

李沆

松花鈕 大谷堀左

木印

李沆刻

橋鈕

松花木

花六刻

榊原玄圃の印也

可考

此内李沆刻印桂香篆楷古し、葡萄鈕印と共に
 白勢氏の舊物多しと云ふ此二點を以て價四十兩を投
 す印紙味は不慮の致味多し、此の骨董二點は
 桂香のふくみ、珍物たる所のよめ、白勢の舊物
 二條、一々八代傳象眼入香指と時代多し、脚
 部は三條の象眼あり、其のつらもスツキリし
 心地よきもの也、是し八代の上乗の品と云ふべし
 信の一々古物、新裡の香合也、香をこけしの蓋印
 あり、体物あり、可也、價高し、是れも他人の珠
 石を大奪し、價の廉不慮論するも、好まざる也
 十月十日迄(一)

〇大江丸の古袋一揃を高くし、事見えしもの也

社をいふ方の格うあらうとて、
純正の産物を出し、
毒物も、
の年産物を刻し、
本力ある、
馬氏親方の傳り、
あるものし、
云々

(大正五年十月十日)

〇頃の産物、
得んとつと、
ろ船載の、
くろく、

十二
おん

し程、
とたくし、
鄭堂、
の日用、
る所、
木米、
ころの、
口や、
防、
と、
た、
中、

の方向は... 十二

新報

休無中年

本報... 新報社

中浦原の柿不作

東京電

獨軍最近損害... 佛軍陣地獲得... 聯合軍の到着

蘭人家屋焼拂... 内閣組織計畫

偉人竹内式部君

忠烈誰れか仰がざらむ

明日白山公園内... 竹内式部君の追諡式

英靈千古



刻木氏部阿崎柏

竹内式部君像... 本覺寺の追諡式

畜産飼育注意

手入れがわるい

吉田家に初めて... 村上水電會社總會

當時の越後... 少壯京都に

40 30 20... 1 2 3 4 5 6 7 8 9

百五十年前の偉人

新潟市が、管内式部を有するは新潟市としての誇り也。...

恙虫母虫

川村博士談

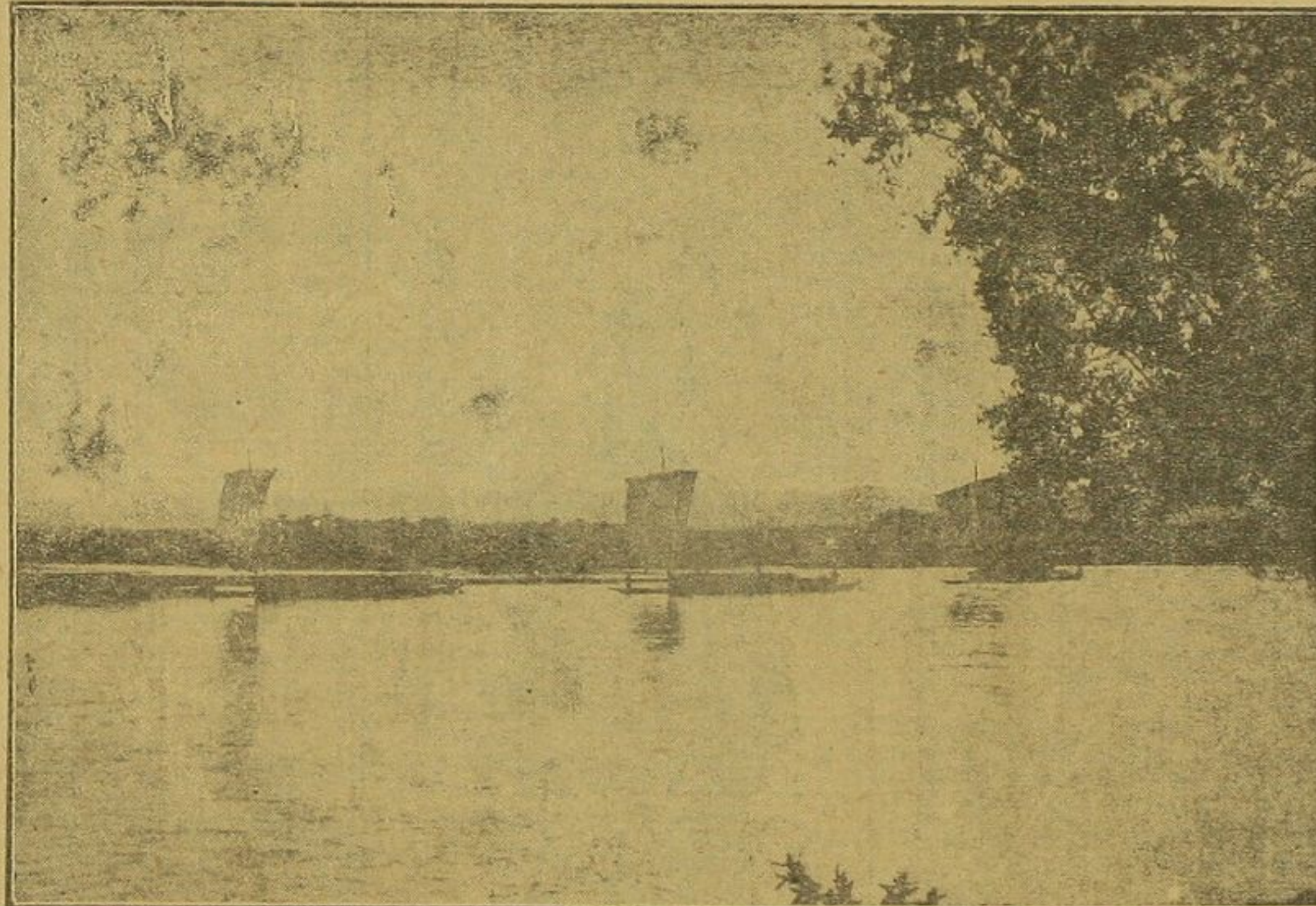
本邦固有の恙虫病の研究の最も著しき者にして、...

本邦固有の疾病

恙虫病は如何なる所にあるか、之は新潟縣では阿賀川、信濃川、及び魚沼川、三川に...

急性的態に出でん 市民大會執行委員は既報の通り十六日午後六時より信濃岸に會合せるが...

秋の川



旅人は此夕ぐれを何思ふ。秋の川邊に影ながめて。花作

船舶輸出問題

最近我國海運界は其船舶の多少の餘裕を生じたるを以て我社外船主にして...

起らんとする

大紡績業

新潟の一大工業 新潟紡績株式會社は中野半彌氏の主唱にて資本百萬元總機數二萬機を以て...

郡市事務巡視

本縣内務部長鑑幹氏は三悪、山本、村田、塚田四氏を隨へ十八日より三日間に亘り西浦原郡役所に於ける事務巡視として出張する由なるが...

兩會聯合大會

西浦原郡青年聯合大會並に信濃郡人分會聯合會は十月二十六日彌彦に於て開催する由にして右に付十七日同役員は彌彦に會合し大會開催の件に關し打合せをなしたり

教會創立紀念式

新潟市營通二番町新瀧教會は来る十月二十二日創立三十年に相當するより同日は紀念禮拜を執行する外紀念大會開催を催し男爵村市左衛門、木村清、松阿部清藏氏等の説教ある由

北浦收入役會

北浦中條町四ヶ村の收入事

大江丸の自畫像... 細き船流石の星... 十月月あり...

の文晁の歌の一編と婦人文云

文晁のきらい雨降南のめりぬ人たあは
文晁のすきい姑夫米のめり勤うたは
唐成載多の唐書との口

A blank ledger page with a blue border and 15 vertical columns. A small blue tab is visible on the left edge.

A blank ledger page with a blue border and 15 vertical columns. A small blue tab is visible on the right edge.

十二
吉

以下全て
白紙

